

しんぱん  
新版

しどうようもんしゅう  
指導要文集

だいいっしょう

しんじん

きほん

第一章

信心の基本

きゅうどう

ぎょうがく

にどう

求道（行学の二道）

ほう よ にん よ と たま そら きよう  
「法に依つて人に依らざれ」と説かせ給いて候えば、経

と  
のごとくに説かざるをば、いかにいみじき人なりとも

ごしんよう

そらろ

御信用あるべからず候か。

001 唱法華題目抄

しょうほつくだいもくしやう

きゆうどう

ぎやうがく

にどう

求道（行学の二道） 12ページー14行

無道心の者、  
むどうしん もの

生死をはなるることはなきなり。  
しょうじ 離

005 開目抄  
かいもくしょう

求道（行学の二道）  
きゅうどう ぎょうがく にどう

121 ページ 8 行



いまだ淵底を究めず法水に臨む者は深淵の思いを懷き、  
人師を見る族は薄氷の心を成せり。ここをもつて金言  
には、「法に依つて人に依らざれ」と定め、また爪上の土  
の譬えあり。もし仏法の真偽をしる人あらば、尋ねて師と  
すべし。求めて崇むべし。

034 聖愚問答抄上

求道（行学の二道）  
550 ページ 15 行

ぶつぽう ひと きせん よ  
仏法はあながちに人の貴賤には依るべからず、ただ経文  
きぎ み いや  
を先とすべし。身の賤しきをもつて、その法を軽んずるこ  
となかれ。

034 しょうぐもんどうしやうじやう  
(聖愚問答抄上)

きゆうどう きやうがく にどう  
求道(行学の二道)  
555 ページー5行

この書、

しよ

御身をおんみ

はな

離さず常に御覧あるべく候。

そうろう

036 (如説修行抄

によせつしゆぎようしやう

求道 (行学の二道)

きゆうどう

ぎようがく

にどう

605 ページ 11 行)

この文を、ふみ 心ざしあらん人々は寄り合つて御覧じ、こころ 料簡りようけん  
そうら 候いて、こころ 心なぐさませ給え。慰 たま

122 佐渡御書 さどごしよ

求道 きゅうどう (行学の二道) ぎょうがく にどう

1291 ページ 12 行



いっさい しよにん

一切の諸人、

かた

これを語れ。

けんもん

これを見聞し、

こころざしあ

志有らん人々は、

ひとびと

たが互いに

127 法華行者逢難事

ほつけぎようじやほうなんじ

きゆうどう

求道（行学の二道）

ぎようがく

にどう

1303

ページー14行

わ もんけ よる ねむ た ひる いとま とど あん  
我が門家は、夜は眠りを断ち昼は暇を止めてこれを案ぜ

いっしょうむな す ばんざいく  
よ。一生空しく過ごして万歳悔ゆることなかれ。

ときどのごしよ し かだんみんごしよ  
137 富木殿御書（止暇断眠御書）

きゅうどう ぎょうがく にどう  
求道（行学の二道） 1324 ページ 8 行

にちれん もんか よる ねむ じかん ひる すんか お いっしょう  
日蓮の門下は夜は眠る時間をさき、昼は寸暇を惜しんで、一生

じょうぶつ かんが いっしょう ます  
成仏のことを考えなさい。一生を空しく過ごしてしまつて、

えいえん こうかい のこ  
永遠にわたる後悔を残してはなりません。

この法門は、  
ほうもん

義理を案じて義をつまびらかにせよ。  
ぎり あん ぎ 詳

160 三大秘法稟承事 (三大秘法抄)  
さんだいひほうしやうじ

求道 (行学の二道)  
きゆうどう ぎやうがく にどう

1387 ページ 17 行

だいほう ぐつう

ほう

かなら

いちだい

しょうぎよう

この大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を

あんち はつしゅう しょうしよ しゅうがく

安置し八宗の章疏を習学すべし。

そやにゆうどうどのもとごしよ

## 162 曾谷入道殿許御書

きゆうどう ぎようがく にどう

求道（行学の二道）

1408 ページ 14 行

だいほう だいしょうにん ぶつぽう

ひろ

しゃくそんいちだい

この大法（大聖人に仏法）を弘めるためには、釈尊一代の

しょうぎよう そな はつしゅう くしや じようじつ りつ けごん さんろん ほつそう

聖教を備え、八宗（俱舎、成実、律、華嚴、三論、法相、

てんだい しんごん かくしゅうは しょもつ まな

天台、真言の各宗派）がよりどころとしている書物を学ぶべきで

す。

この御文は、  
おんふみ

藤四郎殿の女房と常によりあいて御覧ある  
ふじしろうどの にようぼう つね 寄 合 ごらん

べく候。  
そうろう

193 (同生同名御書)  
どうしやうどうみやうごしよ

求道 (行学の二道)  
きゆうどう ぎやうがく にどう

1519 ページ 13 行

道みちのとおき遠に心こころざしのあらわるるにや。  
顚

おとごぜんのははごしよ

(241 乙御前母御書

きゆうどう

ぎようがく

にどう

求道 (行学の二道)

1684

ページー  
16 行)

じとう じとうとう ねんぶつしや ねんぶつしやとう にちれん あんじち ちゆうや た

地頭・地頭等、念仏者・念仏者等、日蓮が菴室に昼夜に立

添 通 ひと 惑 責

ちそいて、かよう人もあるをまどわさんとせめしに、

あぶつぼう 櫃 背負 よなか たびたびおん 渡

阿仏房にひつをしおわせ、夜中に度々御わたりありしこ

よ 忘 ひも さどのくに う 変

と、いつの世にかわすらん。ただ悲母の佐渡国に生まれか

わりてあるか。

265 千日尼御前御返事（真実報恩経の事）  
せん にちあまごぜんごへんじ しんじつほうおんぎよう こと

きゆうどう きようがく にどう

求道（行学の二道）  
1741 ページ 10 行

にちれん 恋  
日蓮こいしくおわせば、常に出ずる日、ゆうべにいずる月  
を<sup>拝</sup>おがませ給え。<sup>たま</sup>いつとなく日月にかけをうかぶる身な<sup>み</sup>  
り。

(269 国府尼御前御書

ここのあまごぜんごしよ

求道 (行学の二道)  
きゆうどう ぎようがく にどう

1756 ページ 2 行



ぎょうがく

にどう

励

そうろう

ぎょうがく絶

ぶつぽう

行学の二道をはげみ候べし。

行学たえなば仏法はある

われ

ひと

きょうけそうら

ぎょうがく

しんじん

べからず。

我もいたし、人をも教化候え。

行学は信心よ

起

そうろう

ちから

いちもんいつく

語

りおこるべく候。力あらば一文一句なりともかたらせ

たも

給うべし。

(280 諸法実相抄

しよほうじつそうしやう

きゆうどう

ぎょうがく

にどう

求道（行学の二道）

1793

ページー3行）

ぎょう

がく

にどう

はげ

しんじん

じつせん

きょうがく

けんさん

行・学の二道を励んでいきなさい。

信心の実践、教学の研鑽

ぶつぽう

せいめい

みずか

じつせん

がたえてしまえば、仏法の生命はありえません。

自らも実践し、

ほか

ひと

ぶつぽう

おし

ぎょう

がく

しんじん

他の人にもこの仏法を教えていきなさい。行・学は信心からおこ

ちから

ってくるのです。もし力があるならば、他人にも仏法の一文一句で

かた

あつても語っていきなさい。

たにん

ぶつぽう

いちもんいつく

よ　で　しとう　　しように　　しゆぎよう　　た　　ちしや  
予が弟子等は、我がごとく正理を修行し給え。智者・  
がくしように　　み　　じごく　　お　　なに　　せん　　あ  
学匠の身となりても、地獄に堕ちては何の詮か有るべ  
き。　　せん　　ときどきねんねん　　なんみようほうれんげきよう　　とな  
詮ずるところ、時々念々に南無妙法蓮華經と唱うべ  
し。

（281 十八円満抄　　じゆうはちえんまんしょう）

求道（行学の二道）　　きゆうどう　　ぎようがく　　にどう

1803 ページ 1 行

ほけきよう

ほうもん

聞

しんじん

励

法華經の法門をきくにつけてなおなお信心をはげむを、

真

どうしんじや

もう

てんだい

じゅうらんにしよう

まことの道心者とは申すなり。天台云わく「從藍而青

あい

あお

うんぬん

しやく

こころ

（藍よりして、しかも青し）」云々。この釈の心は、

藍

は

染

青

あいは葉のときよりも、なおそむればいよいよあおし。

ほけきよう

藍

しゆぎよう

深

青

法華經はあいのごとし、修行のふかきはいよいよあおき

がごとし。

（297 上野殿後家尼御返事

うえのどののごけあまごへんじ

きゆうどう

ぎようかく

にどう

求道（行学の二道）

1834

ページー1行

ほけきよう

さんだいひほう

なんみようほうれんげきよう

ほうもん

き

法華經（三大秘法の南無妙法蓮華經）の法門を聞きたびにますま

しんじん はげ ひと

どうしんしゃ ぶつどうしゆぎよう はげ ひと

す信心に励む人を、ほんとうの道心者（仏道修行に励む人）と

てんだいだいし まかしかん なか あお あい い

いうのです。天台大師は摩訶止観の中で「青は藍より出でて」しか

あい あお の しゃく いみ あい は とき

も藍より青し」と述べています。この釈の意味は―藍は葉の時より

そ そ あお いろ こ ほけきよう

も、染めれば染めるほど、いよいよ青い色が濃くなる。法華経

ごほんぞん あい しんじん しゆぎよう ふか あい

（御本尊）は藍のようなもので、信心の修行が深いことは、藍が

そ あお

染めるにしたがつてますます青くなっていくようなものである―とい

うことです。

いかに賤いやしき者ものなりとも少し我われより勝れて智慧ちえある人ひとに

は、この経きようのいわれを問とい尋たずね給たもうべし。

374 松野殿御返事まつのどのごへんじ（十四誹謗じゆうしひぼうの事こと）

求道きゆうどう（行学ぎようがくの二道にどう）

1988 ページ14行

ごせ ねが

後世を願わんには、彼の雪山童子のごとくこそあらまほし

そうら

まこと

わ

みひん

ふせ

たから

くは候え。誠に我が身貧にして布施すべき宝なくば、

わ

しんみよう

す

ぶつぽう

う

たよ

しんみよう

す

我が身命を捨てて仏法を得べき便りあらば、身命を捨て

ぶつぽう

がく

て仏法を学すべし。

まつのどのごへんじ

じゅうしひぽう

こと

### 374 松野殿御返事（十四誹謗の事）

きゅうどう

ぎょうがく

にどう

求道（行学の二道）

1993

ページー7行

ほうもん

佐 渡 くに

流

そうら

いぜん

ほうもん

法門のことは、さどの国へながされ候いし已前の法門

ほとけ

にぜん

きよう

思

は、ただ仏の爾前の経とおぼしめせ。

385  
三沢抄

みさわしよう

きゆうどう

ぎようがく

にどう

求道（行学の二道）

2013  
ページー8行

にちれんだいしようにん

ほうもん

さど

るざい

いぜん

（日蓮大聖人の）法門は、佐渡へ流罪された以前のものについ

しやくそん

いちだいしようぎよう

にぜんきよう

たちば

ては、釈尊の一代聖教のなかにおける爾前教の立場のように

おも

思いなさい。



かかる所ところへ尋ね入らせ給いて候こと、いかなる宿習しゆくじゆう  
なるらん。釈迦仏は御手を引き、帝釈は馬となり、梵王ぼんのう  
みは身みに随したがい、日月は眼となりかわらせ給いて入らせ給い  
有けるにや。有ありがたし、ありがたし。難

399 (新池殿御消息

にいけどのごしようにそく

求道きゆうどう (行学ぎょうがくの二道にどう)

2061 ページ 4 行

ごせ ねが もの  
後世を願わん者は、名利名聞を捨てて、いかに賤しき者  
ほけきよう と そう しょうじん によらい  
なりとも法華經を説かん僧を生身の如来のごとくに敬う  
べし。

(400 新池御書

にいけごしよ

きゆうどう きようがく にどう  
求道 (行学の二道)

2068 ページ 17 行

まっぼう

今日

頃 ほけきよう

いっくいちげ

謂

たず

末法のきようこのごろ法華經の一句一偈のいわれをも尋ね

とひと

有

難

問う人はありがたし。

みようほうあまごぜんごへんじ

いっくかんじん

こと

407 妙法尼御前御返事（一句肝心の事）

きゅうどう

ぎようかく

にどう

求道（行学の二道）

2098 ページ 8 行

まっぼう こんにちは

ほけきよう

いっくいちげ

しゆし

と

ひと

末法の今日において、法華經の一句一偈の趣旨をたずね問う人は

まれです。

によにん

み

たびたび

ほうもん

たず

たも

女人の身として度々かくのごとく法門を尋ねさせ給うこと

ただごと

は、ひとえに只事にあらず。

みよういちによごへんじ

じりじようぶつしやう

412 妙一女御返事（事理成仏抄）

きゆうどう

ぎやうがく

にどう

求道（行学の二道）

2134

ページー6行

がくもんみれん  
学問未練にして名聞名利の大衆は、  
予が末流に叶うべか  
らざること。

456  
（日興遺誠置文）  
につこうゆいかいおきぶみ

きゅうどう  
求道（行学の二道）  
ぎょうがく  
にどう

2196  
ページー3行

とうもんりゆう

当門流とうもんりゆうにおいては、御書ごしよを心肝しんかんに染め、

極理ごくりを師伝しでんし

いとまあ

だいけき

て、もし間有いとまあらば台家だいけを聞くべきこと。

につこうゆいかいおきぶみ

(456 日興遺誠置文)

きゅうどう

ぎようかく

にどう

求道（行学の二道）

2196 ページ 7 行

げれつ もの

下劣の者たりといえども、

われ ちすぐ

我より智勝れたる者をば、

あお

仰い

ししよう

で師匠とすべきこと。

(456 日興遺誠置文

につこうゆいかいおきぶみ

きゅうどう

求道 (行学の二道)

ぎょうがく

にどう

2196 ページ 13 行